

## 本物の花の産業人・文化人：岩佐吉純氏をしのぶ

花葉会会長 安藤敏夫

平成13年(2001)4月4日、園芸学会は岩佐吉純氏に対して園芸功労賞「花き産業の発展に対する永年の功労」を贈っています。表彰式は、園芸学会平成13年度春季大会(於：東京農業大学厚木キャンパス)で行われました。それは、園芸の文化と産業の発展に顕著な功労があった方だけが享受できる園芸学会最高の名誉です。

岩佐吉純氏は、㈱サカタのタネの専務取締役として、世界の花ビジネスの最前線で活躍されただけでなく、日本の花の文化と産業の非常に幅広い範囲にわたって活躍されたことは、平成13年の園芸学会雑誌70巻別冊1の37頁に、園芸功労賞の受賞理由として詳しく書き止められています(2001年の花葉 No. 20の41頁に引用)。

岩佐吉純氏は花葉会の育ての親でもありました。花葉会はその起源を戦前に遡ることができますが、昭和56年(1981)に会則を整備して、「新生」花葉会となってから、非常に活発に活動するようになりました。花葉会は、会長の系譜を大学人で、幹事長の系譜を実業人で、それぞれ構成する体制としています。しかし、実際の「新生」花葉会は、初代会長＝横井政人、初代幹事長＝岩井英明に、岩佐氏を加えた3人の主導体制、つまりトロイカ体制で動き出したのです。岩井幹事長の退任を受けて、岩佐氏は平成5年(1992)から平成13年(2001)までの9年間、2代目の幹事長として辣腕を振るわれました。私たち花葉会幹事は、幹事会の度に、岩佐氏の的確な状況判断と、機敏な決断という、リーダーに求められるものの何たるかを目前に経験させて頂いたのです。今や日本の花産業・花文化の情報発信基地となった花葉会20年のパワーは、大きな組織を運営することに長けた岩佐氏の能力に大きく依存して育ったのです。

若くして岩佐氏を失ったことは、ご親族だけでなく、日本の花に関する文化と産業にとって不幸なことです。花葉会も深い悲しみの中にいます。花葉会は重要案件の判断に先立って、全てに岩佐氏の意見を伺ってきました。花葉会は一時的に不安定になるかもしれませんが、しかし、岩佐氏など先人の敷いた一本道を力強く歩める体制を、

なるべく早く再構築する努力をいたします。

本物の花の産業人であり、なおかつ本物の花の文化人であった稀有の人、岩佐吉純氏のご冥福を祈ります。

### 岩佐吉純氏 業績

1. カタログを全頁色刷りとし、現在のスタイルを作り上げた。また種子を防湿包装し、セロファンパックした高級絵袋種子を開発。
2. 海外からの新しい園芸植物の積極的な導入と普及、新品種の育成に貢献。クリサンセマム・マルチコーレ、クリサンセマム・パルドーサム、コスモス「ベルサイユ」、ヒマワリ「太陽」、トルコギキョウのF1品種、シネリリア、ポットガーベラ、プリムラ・ジュリアン、パンジー、デージー、サルビアなど。
3. 新しい園芸資材の導入と普及。ピートモス、ピートバン、ジフィーポットなど。趣味園芸家用にBナインや農薬類の小袋詰め、エアゾール型殺虫剤など。
4. STシール、スターチスのクリーン種子、ペチュニアやトルコギキョウのペレット種子、アサガオのクイック種子など、発芽を高めるための技術を導入。
5. 花の普及に貢献。園芸文化協会主催の「花の文化展」(昭和34～)の展示に参画。会社の60周年(昭和48年)70周年記念のフラワーショーを実施。わが国初のバックトライアル(昭和51年)を実施。
6. 花き育種の発展に貢献。平成2年5月～8年4月、日本種苗協会花き部会長代行として、種苗技術研究会シンポジウムや種苗コンクール(全日本花き種苗審査会)の開催と運営を指揮。
7. 平成2年開催の「国際花と緑の博覧会」で日本種苗協会の総合プロデューサーとして『光の館』に全期出展。わが国初の国際コンテストを実施。
8. 国体の花として花壇草花の普及に努める。千葉、福井、鳥取、青森などの開催県では産地指導も行う。韓国のオリンピック開催時花卉栽培の指導にあたる。
9. 昭和61年横浜国際女子駅伝でプリムラ5,000鉢を競技場内に初めて飾る。各地の競技場でフィールドをプランター植えの植物で飾るきっかけを作った。
10. 「花卉産業の振興に関する研究会」「食用花卉導入委員会」「種苗分類特性調査委員会」など、農林水産省の各種委員会の委員を歴任。日本の花卉産業振興政策の方向づけに多大の寄与をした。

(「花葉」20号(2001年)より抜粋)